

学生相談室 2022年度利用者統計報告

甲南大学学生相談室 西 浦 太 郎

I. はじめに

本稿は2022年度の学生相談室の利用者統計であるが、2019年に始まったコロナ禍は引き続き学生生活や授業形態に大きな影響を与えたため、最初に過去3年のコロナ禍の状況と本学の対応を概観しておきたい。

コロナ禍の影響を本格的に受け始めたのは2020年度であるが、この年度は一部の例外を除き、前期・後期を通してほぼ全ての授業がオンラインで実施された。

続く2021年度前期は、感染の収束が期待され、対面授業が再開されたが、感染再拡大のため大半の授業が再び遠隔授業となった。その後、夏のワクチン接種の開始を契機に、後期からは段階的に対面授業が増えた経緯がある。

2022年度は、一部の大講義を除き、多くの授業が対面で実施された。前期と後期のそれぞれの終

わりに感染者数が急増した時期もあったが、対面授業実施の方針に変更はなかった。この年度は、それまでコロナ禍による活動自粛が続いた中で、自粛が緩和され、社会活動が徐々に再開し、学生同士の接触が開始・再開した年度であった。以上の経緯を踏まえ、2022年度の利用者統計を報告する。

II. 学生相談室の体制

本学では、メインキャンパスである岡本キャンパス、西宮キャンパス（CUBE）、ポートアイランドキャンパス（FIRST）の3キャンパスにそれぞれ学生相談室が設置されている。学生・関係者は、基本的に所属するキャンパスの相談室を利用するが、キャンパスをまたいでの利用も可能なため、本報告では3キャンパスの利用者を合計した集計結果を用いている。

表1 2022年度利用率

	利用者数	在籍者数	利用率 (%)
男子	208	5,145	4.04
女子	203	3,699	5.49
不明	1	0	-
総計	412	8,844	4.66

表4 10回以上継続利用者数

	継続利用者	利用者数	利用者数に占める割合 (%)
男子	69	208	33.17
女子	65	203	32.02
不明	1	1	-
総計	135	412	32.77

表2 在籍学生総数

	文学部	経済学部	法学部	経営学部	理工学部	知能情報学部	マネジメント創造学部	フロンティアサイエンス学部	大学院	合計
男子	602	1,149	928	948	499	487	324	99	109	5,145
女子	1,210	411	604	615	176	71	456	88	68	3,699
総計	1,812	1,560	1,532	1,563	675	558	780	187	177	8,844
全体に占める割合 (%)	20.49	17.64	17.32	17.67	7.63	6.31	8.82	2.11	2.00	100

2022年4月1日時点

表3 2009年度～2022年度までの領域別利用者数（実数）

	心理	心理検査	修学	進路	生活・健康	グループワーク	合計	在籍総数	利用率 (%)
2009年度	171	43	36	18	22	63	353	9,174	3.85
2010年度	212	37	43	23	23	49	387	9,376	4.13
2011年度	203	70	46	21	16	50	406	9,521	4.26
2012年度	180	34	42	30	12	27	325	9,666	3.36
2013年度	193	49	58	19	20	52	391	9,545	4.10
2014年度	170	44	45	22	11	67	359	9,235	3.89
2015年度	170	37	71	23	19	78	398	9,195	4.33
2016年度	152	13	59	29	13	64	330	9,044	3.65
2017年度	164	21	52	18	12	91	358	9,277	3.86
2018年度	158	7	70	18	19	86	358	9,252	3.87
2019年度	161	16	81	17	14	78	367	9,037	4.06
2020年度 (コロナ禍初年)	150	0	111	17	8	66	352	8,910	3.95
2021年度(2年目)	202	6	134	18	20	109	489	8,725	5.60
2022年度(3年目)	224	5	111	14	13	45	412	8,844	4.66

Ⅲ. 年間利用者数

2022年度の学生相談室の総利用件数（のべ件数）は、4,426件であった。また、利用者（実数）は、412名であり、これは在籍学生総数8,844名の4.66%にあたる（表1）。のべ件数と実数共に過去2番目に多い水準である（表3）。なお、過去最も相談件数が多かったのは、コロナ禍2年目の2021年度であった。

表3は過去14年の領域別利用者数（実数）を示したものであるが、2022年度の相談領域の内訳¹⁾を見ると、＜心理相談＞が最も多く、次いで＜修学相談＞、＜グループワーク＞の順となっている。2021年度は、コロナ禍によるオンライン授業の影響で＜修学相談＞が過去最多であったが、2022年度は＜心理相談＞が過去最多であるのが特徴的である²⁾。

増加の要因としては、2022年度に活動自粛が緩和され、これまでコロナ禍の中で心理的な悩みや孤独感を抱えていた学生が相談に至ったことや、大学や社会における対人接触が急激に増えたため、学生の心理・社会的な負担感や不安感が増したことなどが考えられる。

なお、2021年度比で見ると、＜心理相談＞が増

加し、＜修学相談＞が減少、＜グループワーク＞が約半減している。

また、＜グループワーク＞の実数は減少しているが、のべ件数では増加しており、この点については後述する（表7）。

次に、10回以上の相談利用があった継続利用者数³⁾は、男性69名、女性65名、その他・不明が1名で、合計135名であった（表4）。相談室を利用する学生のうちの32.76%が継続的な支援・関わりを必要としているといえる。

また、継続利用者の年度末における相談の転帰を見ると、＜次回予約あり＞75.5%、＜on demand＞が17.7%、＜終了＞が5.91%であった（図1）。＜次回予約あり＞と＜on demand＞を

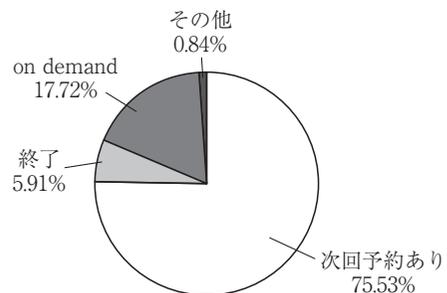


図1 相談の転帰（10回以上の継続利用者）

表5 学部・学年別利用者数（実数）

学部	1回生	2回生	3回生	4回生	4年以上 在籍者	卒業生	大学院生	他・不明	総計
文学部	21	26	24	25	6	0	1	3	106
経済学部	13	8	6	8	2	0	0	0	37
法学部	13	12	16	8	2	1	0	1	53
経営学部	9	4	10	5	2	2	0	0	32
理工学部	15	13	3	11	6	0	2	0	50
知能情報学部	8	4	2	7	2	1	1	0	25
マネジメント創造学部	3	6	2	9	2	0	0	1	23
フロンティアサイエンス学部	10	3	4	7	4	0	3	0	31
その他・不明	6	2	0	0	1	16	0	30	55
総計	98	78	67	80	27	20	7	35	412

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、法科大学院＝法学部、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、入学前で学年配当が相談時点ではない者、KIEC（国際交流センター）の留学生、匿名での相談者等を含む。

合わせると、年度をまたいだ継続率は93.2%となり、コロナ禍において多くの学生が継続的支援を求めている。なお、コロナ禍が始まった2020年度は、活動自粛も影響し、継続率は32.9%と低かったが、2021年度は92.8%、2022年度は93.2%と高水準で推移している。

【学部における傾向】

本学の学部別の在籍者数を表2に示した。在籍者が多い学部は文学部（1,812）、経済学部（1,560）・法学部（1,532）・経営学部（1,563）であり、これら4学部で全体の73.12%を占める。

学部別・学年別の利用者数（実数）を示したものが表5であるが、最も利用の多い学部は文学部の106名、ついで法学部53名、理工学部の50名となっている。例年、学部内に在籍する学生の数（母数）が多い程、相談者数も多くなるが、2022年度は経済学部と経営学部の利用者数が少ない。

【学部における利用領域の傾向】

学部における領域別の利用者数の実数・のべ件数をそれぞれ表6、表7に示す。

これを見ると、多くの学部で＜心理相談＞が実数・のべ件数共に最も多く、＜修学相談＞がそれ

に続いている。ただし、＜経済学部＞と＜フロンティアサイエンス学部＞に関しては、＜修学相談＞の方が＜心理相談＞よりもやや多いが、これは学生の専攻内容、学生の特徴・困りごとなどが＜修学相談＞の増加につながったと考えられる。（表6）

また、昨年度と比べ＜グループワーク＞の実数が減少しているが、これは2021年度まで理工学部の学生を対象にしたグループワークを2022年度からは授業（正課科目の一部）として提供したため、60名程の学生が減じたことが影響している。これらの理工学部の学生を2021年度の数値から差し引いて見た場合、2022度のグループワークのべ参加者数は前年度よりも増加している（表7）。増加要因としては、本学の学習管理システム（LMS）であるMy KONANや「学生相談室新型コロナウイルス特設サイト」のブログにて積極的に広報活動を行ったことが挙げられる。また、対面授業への移行に伴い、人と触れ合い、活動できる場を求める者が増えたことも影響している可能性がある。

なお、2022年度は＜心理検査＞の利用者数（実数）が5件であった。しかし、のべ件数では67件あり、他の主訴で来談した学生にも多く利用され

表6 学部・領域別利用者数（実数）

学 部	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
文 学 部	67	2	18	3	4	12	106
経 済 学 部	15	1	18	1	1	1	37
法 学 部	26	0	19	2	0	6	53
経 営 学 部	19	0	7	1	0	5	32
理 工 学 部	24	1	15	1	1	8	50
知 能 情 報 学 部	9	1	7	3	0	5	25
マネジメント創造学部	18	0	4	1	0	0	23
フロンティアサイエンス学部	13	0	16	0	1	1	31
そ の 他 ・ 不 明	33	0	7	2	6	7	55
総 計	224	5	111	14	13	45	412

表7 学部・領域別利用者数（のべ件数）

学 部	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
文 学 部	872	15	257	39	39	60	1282
経 済 学 部	250	3	82	7	1	3	346
法 学 部	225	10	123	9	8	20	395
経 営 学 部	263	5	62	4	1	72	407
理 工 学 部	358	6	82	5	5	68	524
知 能 情 報 学 部	147	9	36	24	0	28	244
マネジメント創造学部	295	3	55	12	25	7	397
フロンティアサイエンス学部	275	14	207	17	6	2	521
そ の 他 ・ 不 明	178	2	58	3	20	49	310
総 計	2,863	67	962	120	105	309	4,426

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、法科大学院＝法学部、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、入学前で学年配当が相談時点ではない者、KIEC（国際交流センター）の留学生、匿名での相談者等を含む。

ていることがわかる。修学相談ののべ件数も多い<文学部><フロンティアサイエンス学部><法学部>で心理検査も多く見られることから、修学について相談する中で自分を知る1つの材料として心理検査が利用される場合があると考えられる。また、コロナ禍前までは、毎年、新入生向けオリエンテーションにて学生相談室の紹介と心理検査の案内を行ってきたが、2022年度はコロナ禍の影響で実施できなかった。入学期に心理検査を契機として後の相談につながる事例もあり、比較的重要な位置付けにあるため、今後、実施を検討していく必要があると思われる。

【学年における利用領域の傾向】

次に、各学年における相談数（実数）を見ると、1回生が最も多く、次に4回生、そして2回

生・3回生の順となっている（表8）。

のべ件数（表9）では、4回生が1,094件と最も多く、2回生891件、1回生706件、3回生677件と続く。

1回生の場合、実数の総数では全学年で最多であるが、のべ件数がやや少ない（表8、表9）。実人数増加の背景には、1回生が高校の2年間をコロナ禍で過ごした後に入学しているため様々な経験が不足し、大学への適応に関する不安を有していたために多くの学生が相談室を訪れたことが考えられる。そして、相談室で話をし、ある程度、落ち着いたために数回の面接で終了し、のべ件数としては、少ない結果になったと考えられる。

領域別でみると、<心理相談>では、実数では4回生が最多、その後、2回生が続き、3回生、

表8 学年・領域別利用者数（実数）

学 年	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
1 回 生	35	2	39	0	1	21	98
2 回 生	46	1	16	0	2	13	78
3 回 生	39	1	17	2	3	5	67
4 回 生	49	1	19	4	2	5	80
4年以上在籍者	16	0	7	4	0	0	27
卒 業 生	15	0	2	3	0	0	20
大 学 院	5	0	2	0	0	0	7
そ の 他 ・ 不 明	19	0	9	1	5	1	35
総 計	224	5	111	14	13	45	412

表9 学年・領域別利用者数（のべ件数）

学 年	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
1 回 生	415	21	168	0	9	93	706
2 回 生	505	8	227	3	26	122	891
3 回 生	479	7	158	11	9	13	677
4 回 生	775	25	174	72	20	28	1,094
4年以上在籍者	301	2	126	24	18	36	507
卒 業 生	28	0	8	3	0	1	40
大 学 院	173	4	66	6	3	16	268
そ の 他 ・ 不 明	187	0	35	1	20	0	243
総 計	2,863	67	962	120	105	309	4,426

1回生となっている。4回生の相談や<心理相談>が多いのは例年と同じであるが、卒業を前にそれまでの心理的課題と向き合う学生が増えることが要因と考えられる。

なお、昨年度比で見ると、特に2回生、1回生、その他・不明の学年で<心理相談>が増加している。2回生はコロナ禍2年目のオンライン授業が多く、入学後に友人関係をつくる機会が少なかった学年であり、1回生は高校2年時からコロナ禍に見舞われてそのまま入学している。両学年とも、心理面の不安が増したために心理相談に

至ったと推測される。

次に<修学相談>であるが、実人数では1回生が最多で、4回生、3回生、2回生の順となっている。2021年度は2回生の<修学相談>が最多であったが、2022年度は1回生が多い。また、コロナ禍初年度で入学した学年は、2022年度の時点で3回生になっているが、2022年度は、<修学相談>の相談数が減少しており、修学に関する問題がある程度、落ち着いたことが考えられる。これは肯定的な材料といえよう。

また、<修学相談>ののべ件数を見ると、2回

表10 来談者・領域別利用者数（のべ件数）

来 談 者	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
本 人	2,542	67	357	81	41	309	3,397
両 親	2	0	0	0	0	0	2
父 親	4	0	4	0	0	0	8
母 親	84	0	58	2	5	0	149
教 員	224	0	543	37	58	0	862
そ の 他	7	0	0	0	1	0	8
総 計	2,863	67	962	120	105	309	4,426

生が最も多く、4回生、1回生、3回生と続く。2回生は、実人数に対してのべ件数が多いが、修学関係で訪れた相談者が、単回ではなく複数回に及ぶ修学に関する相談を必要としていたと考えられる。コロナ禍が直撃した時は、渦中にいて混乱が大きかったため問題がすぐには顕在化しなかったものの、ある程度落ち着いた頃に、修学面の課題や心配が現れたと考えられる。

〈進路〉では、のべ件数では4回生が最も多く、4年以上在籍者、3回生と続いている。これらの学年は、卒業が迫り将来の進路や自分自身について考えることが増えるため、相談件数の増加につながっていると考えられる。

また、〈グループワーク〉は、実数では1回生が21名の最多であり、2回生13名、その後、3回生・4回生が5名ずつと続く(表8)。のべ件数別で見ると、2回生が122件、その次に1回生の93件、4年以上在籍者36件、4回生の28件と続いている。2回生と1回生の参加が多いのが特徴的である。

〈心理検査〉ののべ件数では、4回生と1回生が多い。これは、2021年度と同じ傾向である⁴⁾。大学生活が始まった入学年と社会に出る前の卒業年は、自分について考え、向き合うことが多いためと考えられる。

〈その他・不明〉では、留学生の受け入れが再開したため、2022年度は留学生関連の相談が急増した。

【来談者⁵⁾ごとの利用領域の傾向】

表10を見ると学生本人が来室した場合、〈心理相談〉が2,542件と最も多く、全相談の約57.45%を占める。また、〈教職員〉は224件、〈母親〉は84件の相談があるが、学生相談室では学生のみならず、多くの関係者を含めた多面的な心理支援を行っていることが分かる。

〈修学相談〉は、教職員の543件が最多で、次に本人の357件、母親の58件と続く。教職員の相談が多いのは、教職員が相談した件数と、学生相談室のカウンセラーによる障害学生の修学支援の部門でのコンサルテーション・連携も算入されているためである⁶⁾。

また、本人による〈修学相談〉も多く、カウンセラーと学生が共同で、履修や勉強法をはじめとする修学上の課題に取り組んでいるといえる。

IV. 月別利用状況

利用者数を各月毎に集計し、その内訳を示したものが図2である。また、図2の各項目の内訳を付表1に記した。

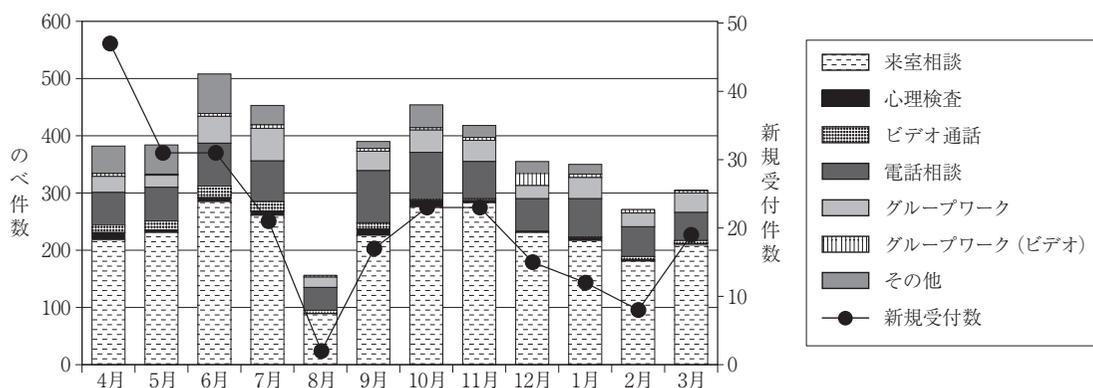


図2 月別利用状況 2022.4.1～2023.3.31

付表1 項目内訳

来室相談	学生本人・保護者等（友人、教職員も含む）が直接、来室し、カウンセリングまたはガイダンスを受けたもの。 カウンセラーが、YOUステーションなど学内の他部署に出向き、行ったコンサルテーションも含む。
心理検査	性格や職業に関する検査・描画を用いた検査・結果のフィードバック。
ビデオ通話	Zoomを用いたオンライン相談。（コロナ禍が開始した2020年度より導入）
電話相談	電話による相談・コンサルテーション *学生とはメールは行わず、教職員のみメール対応。
グループワーク	グループワークには下記の3つが含まれる。 a)「金曜Reアワー」：前期・後期に毎週、午後に様々な企画を学生相談室にて実施 b)「グループワーク」：学生相談室による企画（2023年度は、後期開催） c)「トークタイム」：学生がカウンセラーと昼食に歓談（毎週月・火曜日）

*トークタイムは、オンデマンド授業だったため対面とオンラインを併用。
後期11月からは、月・水は対面で実施。

【2022年度利用件数（のべ件数）の推移】

2022年度は、前期の4月・5月はほぼ同じ水準で推移し、6月に上昇し、7月にやや減少するものの高い水準を保ったまま前期が終了している。夏期休暇期間の8月は大きく減少しているが、これは、例年通りの傾向である。その後、後期開始に伴い9月に上昇し、10月も増加している。その後、11月から減り始め、12月と1月も減少するものの大きくは減らず、2ヶ月間ほぼ同じ水準で推移している。また、学期終了後の2月は減少するが、3月に再び上昇している。

【2022年度の特徴】

コロナ禍前は例年、4月・5月の相談件数が多く、6月・7月に減少する傾向にあった。これは、入学したことや新学期が開始したことに伴い、4月・5月の相談の困りごとが増え、その後、落ち着いたためであった。しかし、2022年度は、4・5月に一定の相談数があった後に6月にむしろ増加している。また、6・7月の相談件数が4・5月よりも多いのも特徴である。これは、学生が学期途中で学業や対人関係、社会活動において多くの課題を抱えたために、学生相談室の利用に至ったためと考えられる。

また、例年、後期は、10月に相談件数が増加し、学期末に向けて減少するが、2022年度は、大きな減少に至らず、一定数を保ちながら少しずつ減っており、前期程の水準ではないものの後期における根強い相談ニーズが伺える。また、例年、後期が終了した後の2・3月は相談数が減少するが、2022年度は3月に増え、新学期に向けた学生・教職員の相談が目立つ。

【新規の利用受付件数（実人数）】

新規の相談は4月が最多であり、5月・6月はほぼ同水準で推移し、7月・8月にかけて減少している。長期夏期休暇に減少するのは例年通りの傾向である。後期は学期開始後の9月から増加し始め、10月と11月はほぼ同じ水準で推移し、12月～2月にかけて減少している。また、年度末の3月は新規受付数が増加しているが、これは2022年度後期の成績発表を受けて対応に困り、新学期開始に向けての相談が増えたことが一因と考えられる。

【相談形態】

2022年の相談形態の内訳を図3と表11に示した。

表11 2022年度相談形態の内訳（月別）のべ

月	来室相談	心理検査	ビデオ通話	電話相談	グループワーク	ビデオ通話(グループ)	メール	手紙	その他	総計
4月	218	13	13	57	45	3	28	5	0	382
5月	231	4	16	59	46	5	21	2	0	384
6月	285	7	20	75	62	5	47	5	2	508
7月	261	7	17	71	31	2	57	6	1	453
8月	89	0	6	40	0	0	18	3	0	156
9月	226	11	11	91	11	1	34	5	0	390
10月	276	11	2	82	36	4	39	4	0	454
11月	283	4	3	65	20	0	37	5	1	418
12月	231	2	0	57	21	0	23	21	0	355
1月	217	4	2	67	17	0	37	6	0	350
2月	181	2	6	52	0	0	24	6	0	271
3月	209	2	6	49	0	0	34	4	1	305
総計	2,707	67	102	765	289	20	399	72	5	4,426

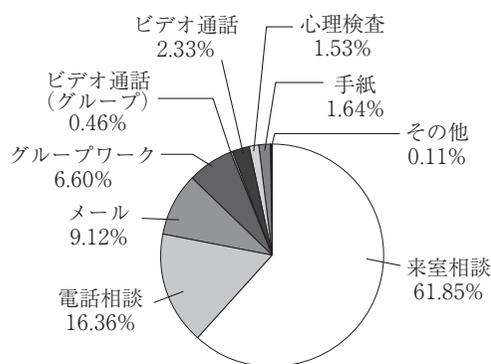


図3 相談形態の内訳

これを見ると＜来室相談＞が61.85%と最も多く、＜電話相談＞が16.36%、＜メール相談＞が9.12%、＜グループワーク＞（対面とグループでのビデオ通話含む）が7.06%となっている。

2021年度と比べると、対面相談が7.05%増え、「対面」が増加している。元々、コロナ禍でも利用者により、対面での相談が望まれる傾向があったが、活動自粛の緩和により、その傾向がより強まった可能性がある。

なお、Zoom機能を用いたビデオ通話（個別とグループ相談）は122件あり、全相談の2.79%に相当する。今後、自粛の緩和の傾向が続けば、オンライン相談が減るかもしれないが、遠隔相談の

メリットを踏まえ、柔軟に活用する必要があると思われる。

V. 利用内容

図4は、学部別の利用内容の内訳を示したものである。文学部・経営学部・理工学部・知能情報学部では＜心理相談＞が6割以上を占め、これは例年通りの傾向である。なお、マネジメント創造学部は＜心理相談＞が74.31%、経済学部が72.25%と70%台と＜心理相談＞の割合がやや高い。

また、全ての学部で＜心理相談＞の次に＜修学相談＞が多いが、これも例年通りの傾向である。しかし、法学部とフロンティアサイエンス学部は＜修学相談＞の割合が多く、中でもフロンティアサイエンス学部は、＜修学相談＞が全相談の4割近くを占めている。これは学部・研究科の専門性、学生の特性や困りごとを受けて、学生相談室スタッフによる専門性に基づく関わりを必要とするケースが多いことが要因と考えられる。

なお、経営学部・理工学部・知能情報学部の＜グループワーク＞の参加者が他学部に比べて割合が高く、これらの学部の学生は、＜グループワーク＞を利用するニーズを有する学生が一定数いるためと考えられる。

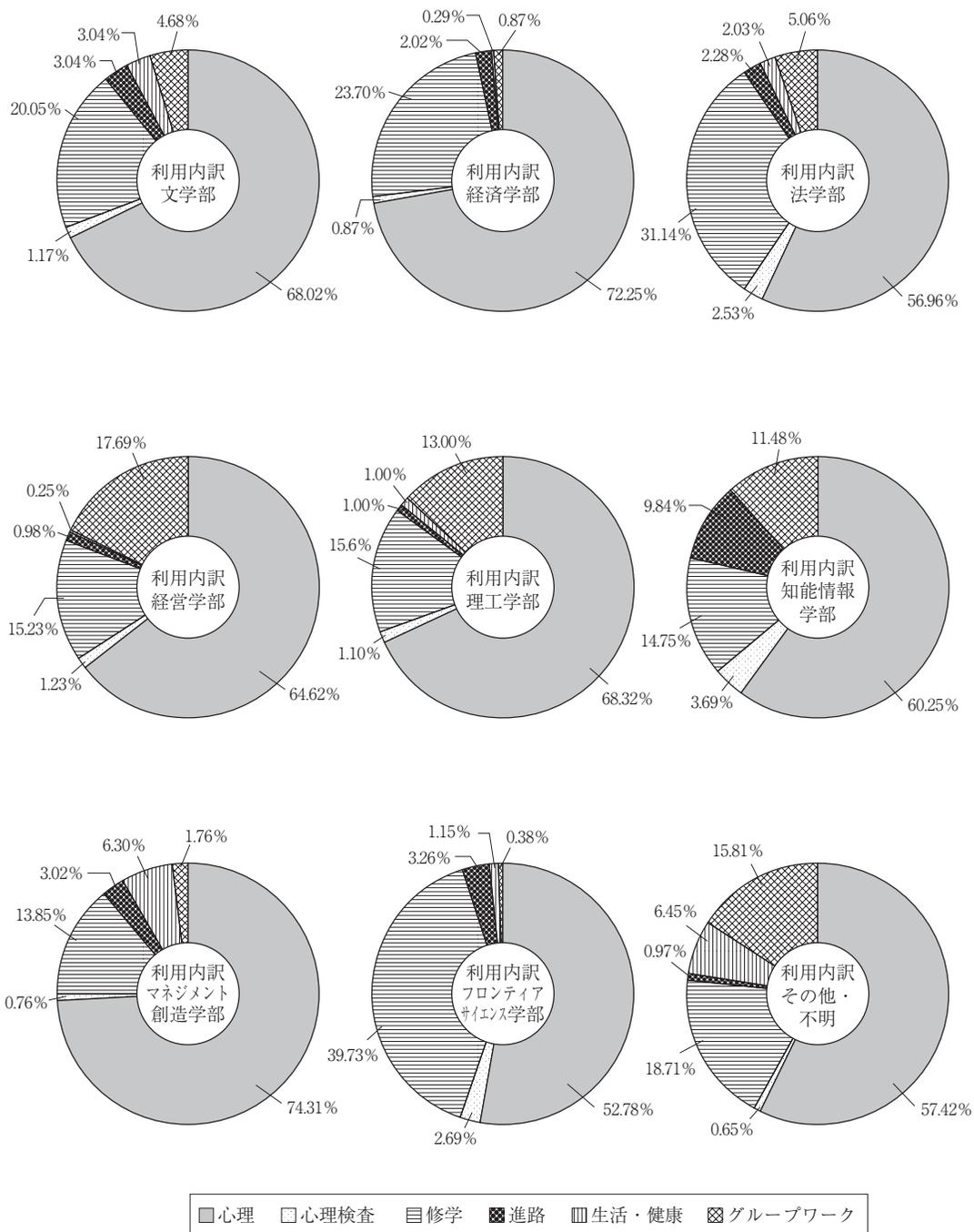


図4 2022年度学部別利用内容の割合 (のべ件数)

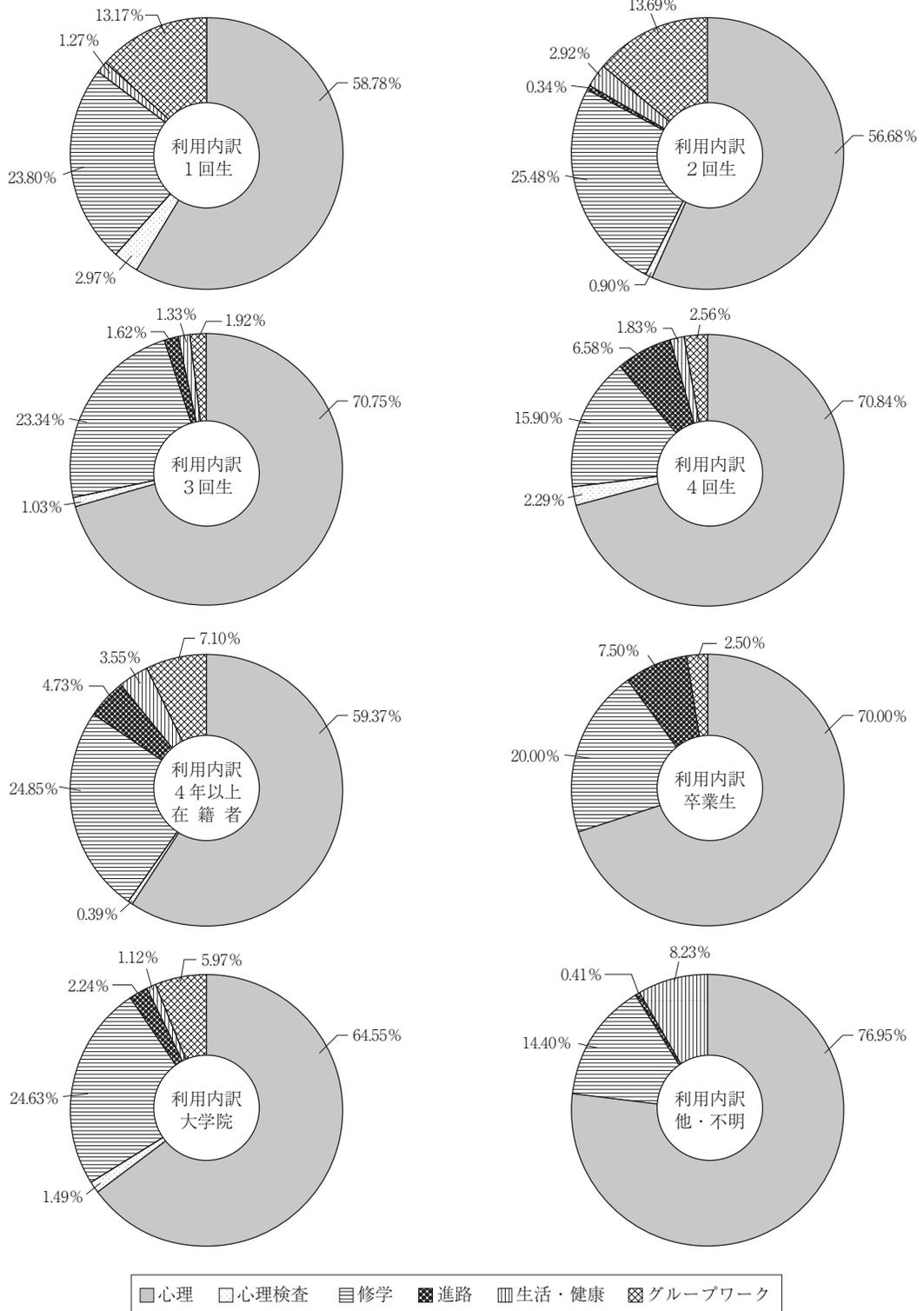


図5 2022年度学年別利用内容の割合 (のべ件数)

次に図5に学年別の利用内容の内訳を示す。1・2回生、4年以上在籍者のうち56～59%が<心理相談>に訪れ、3・4回生では70%台となっている。学年が上がると<心理相談>が増加するのは例年と同じである。なお、昨年度と比べた場合、4年以上在籍者、1回生の<心理相談>が増加している。

<修学相談>では、1回生から大学院生の相談のうち23～25%が修学に関する相談をしている(図5)。4回生のみ15.90%と低い水準にある。昨年度と比較すると、<修学相談>は多くの学年で減少しており、1回生と2回生における相談が大きく減少した。

これは大学による対面・非対面双方による履修指導や修学面の指導が増えたために、学生の困りごとが減り、学生相談室への来室が減少した可能性がある。また、昨年度比では、3回生と4回生の<修学相談>が増加したが、3回生は、依然として修学面の課題を抱えている可能性や、学年が

上がったことに伴い学業における新たな問題が増えた可能性が考えられる。

次に<グループワーク>は、2回生(13.69%)、1回生(13.17%)、4年以上在籍者(7.10%)、大学院生(5.97%)の順が多い。1・2回生は入学後に学内での居場所や新たな体験をする機会を求めて参加した可能性がある。その一方で、3回生(1.92%)と4回生(2.56%)は、少ない。

4年以上在籍者や大学院生などの高学年は少ないものの、修学や研究、就職活動による多くのストレスを抱えているため、グループワークが一つの居場所として機能したことが考えられる。

図6は、年度内に10回以上継続して利用した学生の各学年の割合を示している。10回以上の継続利用者数の割合は、4回生の利用が最も多く(27.19%)、その後、2回生(21.87%)、3回生(16.32%)、4年以上在籍者(11.57%)、1回生(11.22%)の順となっている。

図7に<心理相談>と<修学相談>の利用内容

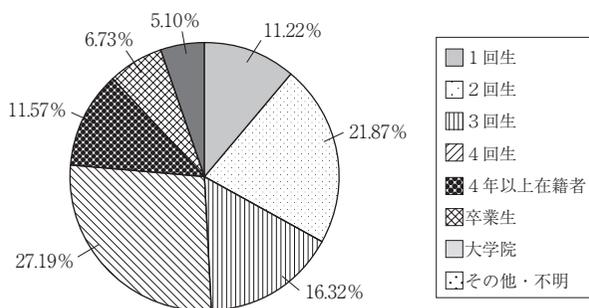


図6 学年別継続利用者数(10回以上)の割合

付表2 領域別下位項目

心理	性格/対人関係/異性問題/家族・友人・その他/精神衛生※/その他
心理検査	性格検査/職業興味・適性検査/フィードバック
修学	学業・履修/転部・転学科/留年・休学・退学/転校・再受験/留学/資格/課外活動/その他
進路	進学・就職・将来/その他
生活・健康	経済・アルバイト/生活環境/事件・事故/健康・身体一般/その他
グループワーク	グループワーク/ウィークリーグループ/ランチアワー

※「精神衛生」には精神科医療を並行して必要とするような症状をもつ者が分類される

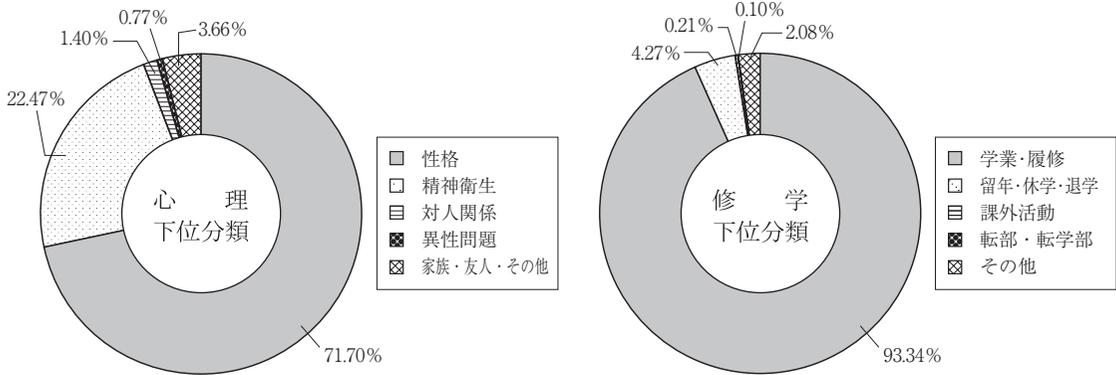


図7 心理・修学領域における下位分類別利用割合 (のべ件数)

別の割合を示した。なお、付表2に学生相談室の利用領域と各下位項目を示した。

2022年度の〈心理相談〉では「性格」に関する相談が71.70%を占める。また、「精神衛生」は22.47%ある。「性格」と「精神衛生」の2つで〈心理相談〉の90%程度を占めるのは例年通りの傾向である。

また、〈修学相談〉では、「学業・履修」が93.34%であり、「留年・休学・退学」が4.27%である。「学業・履修」が9割以上を占めるのは昨年度と同じ傾向である。

VI. おわりに

本報告では、2022年度の利用者統計を報告した。冒頭にも述べたが、2022年度の特徴として、相談件数が2021年度について過去2番目に多く、また、〈心理相談〉の件数が過去最多であったことが挙げられる。〈心理相談〉の増加に関しては、コロナ禍による活動自粛が緩和され、対面での活動が再開し、学生が人と直接会い、集団に入る機会が増え、不安感や心理的負担が増大したことによる影響が多方面で出たと考えられる。2022年度のグループワークにおける参加者数の増加は、不安や体験が少ない中で、学生が守りや安心感がある中で人間関係を作り、新しい体験をした

という気持ちがあったためかもしれない。

また、相談件数であるが、2021年度と2022年度は、過去14年の中で突出して多い。2022年度は、数値としては昨年度より減っているものの、カウンセラー間の話では、多忙さや負荷は前年度とは変わらず、むしろ増しているという実感を持つ者が多かった。

背景には、学生相談室では、コロナ禍により生じた学生の心理・社会的な問題、そしてコロナ禍に関連する身体的な悩みの多くを引き受けてきたが、2022年度は、これらのコロナ禍の影響を受けた学生に加え、元々学生相談室に入室していたと思われる潜在的な心理面の相談ニーズを持つ学生の相談が増えたことが影響していると考えられる。

カウンセラー自身もコロナ禍という未知の状況の中で、自身も感染するリスクを負い、様々な不安を感じながら、3年という長期に渡り学生支援を行ってきたが、そのことによる心身の疲労の蓄積が心配される。医療現場もそうであるが、対人援助を行う側の心労や疲労についてはあまり着目されず、具体的な対策が講じられることが少ない。この点は、実際にコロナ禍の体験をしたカウンセラーに話を聴き、データを集めるなどして、知見を蓄積し、今後に生かしていく必要がある

う。

最後に、学生がコロナ禍をどのように体験しているかには個人差があり、この時期をいかに自分の中に位置付けるかは、もう少し時間が必要と思われる。しかし、学生が大学でいかなる人と出会い、どのような体験をしたかは、今後の人生に無視できない影響を与える可能性がある。今後も学生のために試行錯誤を重ねながら、多様かつ安定した学生との関わりを行なっていきたい。

註

- 1) 実数の相談領域（主訴）の確定方法であるが、各カウンセラーが毎年、担当学生の主な主訴を心理相談・修学相談・進路などの6領域の中から1つ選択して決定している。なお、利用者の毎回の利用における相談領域は、のべ件数に反映されている。
- 2) 2022年度の＜修学相談＞は、少ない訳ではなく、コロナ禍前の2019年度前と比べると依然として多い水準にある。
- 3) 継続利用は、学生とカウンセラーとの合意に基づき、10回以上継続して相談室を利用した者を指す。
- 4) ＜心理検査＞は実数としてのカウントが少なく、の

べ件数が多いが、これは心理検査を主たる目的で来室していないため、実数としてはカウントされていないためである（表8）。のべ件数の多さは、カウンセリング等を受けている途中で自分を知るために心理検査を受け、それがのべ件数に反映されたと考えられる。

- 5) 来談者には、相談・コンサルテーション・情報共有などが含まれる。
- 6) 学生相談室のカウンセラーが障害学生の修学支援を行う部門（YOUステーション）に定期的に出向し、コンサルテーション・連携をした件数が含まれている。

文 献

- 厚生労働省 2023 新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の対応について
<https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html> (2023.11.21 取得)
- 甲南大学 学生相談室 新型コロナウイルス特設サイト
<https://konan-gakuso.wixsite.com/tokusetsu> (2023.12.14 取得)
- 西浦太郎 2022 学生相談室 2020年度利用者統計報告 甲南大学学生相談室紀要 29 72-82
- 西浦太郎 2023 学生相談室 2021年度利用者統計報告 甲南大学学生相談室紀要 30 97-108